

武蔵野学院大学・武蔵野短期大学・日本総合研究所

公開講座 & コラボレーション講座

武蔵野学院大学大学院国際コミュニケーション研究科

武蔵野学院大学国際コミュニケーション学部

博士(英文学)・教授 佐々木 隆

外国文学への招待 ～ 文学と演劇を楽しむ～

[資料]

1	文学作品 名作はなぜ永遠なのか	2
2	文学作品の変容	2
3	演劇の三大要素	2
4	映画の三大要素	2
5	世界文学と映画、ドラマ、アニメ	2
6	イギリス文学と映画	3
7	アメリカ文学と映画	7
8	キャラクター & 童話	8
9	参考文献	14

2007年6月30日

1 文学作品 名作はなぜ永遠なのか

どうして本（文学）を読むのだろうか。

文字にはどんな「力」があるのだろうか。

外国文学は日本でもどうして読まれているのか。

名作と呼ばれる作品が世界中で読まれているのはなぜか。

2 文学作品の変容

文字から台詞へ 演劇（舞台）

文字から台詞+音楽+ダンスへ ミュージカル

文字から映像へ TVドラマ・映画

3 演劇の三大要素

脚本（ストーリー、原作）

演出（演技指導、舞台全体の構成）

キャスト(配役)

4 映画の三大要素

ストーリー

映像

音楽

5 世界文学と映画、ドラマ、アニメ

ギリシャ・ローマ神話

聖書

シェイクスピア

6 イギリス文学と映画

シェイクスピア 『ロミオとジュリエット』(1594)

ロバート・ワイズ、ジェローム・ロビンス監督 『ウエスト・サイド物語』
(1961)

フランコ・ゼッフィレリ監督 『ロミオとジュリエット』(1968)

バズ・ラーマン監督 『ロミオとジュリエット』(1996)

シェイクスピア 『ハムレット』(1600)

ローレンス・オリヴィエ監督 『ハムレット』(1948)

グリゴリ・コジンチェフ監督 『ハムレット』(1964)

フランコ・ゼッフィレリ監督 『ハムレット』(1990)

ケネス・ブラナー監督 『ハムレット』(1996)

マイケル・アルメイダ監督 『ハムレット』(2000)

シェイクスピア 『マクベス』(1606)

オーソン・ウェルズ監督 『マクベス』(1948)

黒澤明監督 『蜘蛛巣城』(1957)

ロマン・ポランスキー監督 『マクベス』(1971)

ダニエル・デフォー 『ロビンソン・クルーソー』(1719)

ジョージ・ミラー監督 『ロビンソン・クルーソー』(1996)

テイエリー・シャベール監督 『ロビンソン・クルーソー』(2003)

ジョナサン・スィフト 『ガリヴァ旅行記』(1726)

ジャック・シャー監督 『ガリヴァ旅行記』(1960)

ジェーン・オースティン 『自負と偏見』(1813)

ジョー・ライト監督 『プライドと偏見』(2005)

メアリー・シェリー 『フランケンシュタイン』(1818)

ジェームズ・ホエール監督 『フランケンシュタイン』(1931)

ジェームズ・ホエール監督 『フランケンシュタインの花嫁』(1935)

ケネス・ブラナー監督 『フランケンシュタイン』(1994)

チャールズ・ディケンズ 『オリヴァー・トウイスト』(1837)

キャロル・リード監督 『オリバー!』(1968)

ロマン・ポランスキー監督 『オリバー・ツイスト』(2005)

スティーヴンソン 『ジキル博士とハイド氏』(1886)

ルーベン・マムーリアン監督 『ジキル博士とハイド氏』(1932)

ヴィクター・フレミング監督 『ジキル博士とハイド氏』(1941)

ジェラルド・キコワース監督 『ジキルとハイド』(1988)

モーリス・フィリップス監督 『ジキル博士とハイド氏』(2002)

H. G. ウェルズ 『タイム・マシン』(1897)

ジョージ・バル監督 『タイム・マシン』(1959)

サイモン・ウェルズ、ゴア・ヴァービンスキー監督 『タイム・マシン』(2002)

ブラム・ストカー 『ドラキュラ』(1898)

トッド・ブラウニング監督 『魔人ドラキュラ』(1931)

テレンス・フィッシャー監督 『吸血鬼ドラキュラ』(1957)

フランシス・コッポラ監督 『ドラキュラ』(1992)

H. G. ウェルズ 『宇宙戦争』(1898)

バイロン・ハスキンス監督 『宇宙戦争』(1953)

スティーヴン・スピルバーグ監督 『宇宙戦争』(2005)

デヴィッド・マイケル・ラット監督 『宇宙戦争』(2005)

ジェームズ・バリー 『ピーター・パン』(1904)

ハーバート・ブレンソン監督 『ピーター・パン』(1924)

ハミルトン・ラスケ、クライド・ジェロニミ、ウィルフレッド・ジャクソン
監督 『ピーター・パン』(1953)

P.J. ホーガン監督 『ピーター・パン』(2003)

*参考映画

スティーブン・スピルバーグ監督 『フック』(1991)

マーク・フォスター監督 『ネバーランド』(2004)

バーナード・ショー 『ピグマリオン』(1913)

アンソニー・アスキス、レスリー・ハワード監督 『ピグマリオン』(1938)

ジョージ・キューカー監督 『マイ・フェア・レディ』(1964)

クライブ・ステーブルス・ルイス 『ナルニア国物語』(1950 - 1956)

(『ライオンと魔女』1950)

アンドリュー・アダムソン監督 『ナルニア国物語 / 第1章 ライオンと
魔女』(2005)

トールキン 『指輪物語』(1954 - 1955)

ラルフ・バクシ監督 『指輪物語』(1978)

ピーター・ジャクソン監督 『ロード・オブ・ザ・リング / 旅の仲間』(2001)

ピーター・ジャクソン監督『ロード・オブ・ザ・リング／ふたつの塔』
(2002)

ピーター・ジャクソン監督『ロード・オブ・ザ・リング／王の帰還』(2003)

ロアルド・ダール『チョコレート工場の秘密』(1966)

メル・スチュアート監督『夢のチョコレート工場』(1971)

ティム・バートン監督『チャーリーとチョコレート工場』(2005)

ダイアナ・ウィン・ジョーンズ『魔法使いハウルと火の悪魔』(1986)

宮崎駿監督『ハウルの動く城』(2004)

J.K. ローリング『ハリー・ポッターと賢者の石』(1997)

J.K. ローリング『ハリー・ポッターと秘密の部屋』(1998)

J.K. ローリング『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人』(1999)

J.K. ローリング『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』(2000)

クリス・コロンバス監督『ハリー・ポッターと賢者の石』(2001)

クリス・コロンバス監督『ハリー・ポッターと秘密の部屋』(2002)

アルフォンス・キュアロン監督『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人』
(2004)

マイケル・ニューウェル監督『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』(2005)

7 アメリカ文学と映画

ナサニエル・ホーソン 『緋文字』(1850)

ロバート・G・ヴィニョーラ監督 『緋文字』(1934)

ヴィム・ヴェンダース監督 『緋文字』(1972)

ローランド・ジョフィ監督 『緋文字』(1995)

ハーマン・メルヴィル 『白鯨』(『モービー・ディック』)(1951)

ジョン・ヒューストン監督 『白鯨』(1956)

ルイザ・メイ・オルコット 『リトル・ウイメン』(『若草物語』)(1868)

ジョージ・キューカー監督 『若草物語』(1933)

マーヴィン・ルロイ監督 『若草物語』(1949)

パディ・ラッセル監督 『若草物語』(1970)

ジリアン・アームストロング監督 『若草物語』(1994)

マーク・トウエイン 『王子と乞食』(1882)

リチャード・フライシャー監督 『王子と乞食』(1977)

セオドア・ドライサー 『アメリカの悲劇』(1925)

ジョセフ・フォン・スタンバーグ監督 『アメリカの悲劇』(1931)

アーネスト・ヘミングウェイ 『陽はまた昇る』(1926)

グレゴリー・ラトフ、ヘンリー・キング監督 『陽はまた昇る』(1957)

アーネスト・ヘミングウェイ 『武器よさらば』(1929)

フランク・ボーゼーン監督 『武器よさらば』(1932)

チャールズ・ヴィダー監督『武器よさらば』(1957)

スコット・フィッツジェラルド『雨の朝パリに死す』(1931)

リチャード・ブルックス監督『雨の巴里に死す』(1954)

ヘンリー・ミラー『北回帰線』(1934)

ジョセフ・ストリック監督『ヘンリー・ミラーの北回帰線』(1970)

マーガレット・ミッチェル『風と共に去りぬ』(1936)

ヴィクター・フレミング監督『風と共に去りぬ』(1939)

ジョン・スタインベック『二十日鼠と人間』(1937)

ゲイリー・シニーズ監督『二十日鼠と人間』(1992)

ジョン・スタインベック『怒りの葡萄』(1939)

ジョン・フォード監督『怒りの葡萄』(1940)

アーネスト・ヘミングウェイ『誰が為に鐘は鳴る』

サム・ウッド監督『誰が為に鐘は鳴る』(1943)

ベティ・マクドナルド『卵と私』(1945)

チェスター・アースキン監督『卵と私』(1947)

テネシー・ウィリアムズ『ガラスの動物園』(1945)

アーヴィング・ラバー監督『ガラスの動物園』(1950)

ポール・ニューマン監督『ガラスの動物園』(1987)

テネシー・ウィリアムズ 『欲望という名の電車』(1947)

エリア・カザン監督 『欲望という名の電車』(1951)

ノーマン・メイラー 『裸者と死者』(1948)

ラオール・ウォルシュ監督 『裸者と死者』(1958)

アーサー・ミラー 『セールスマンの死』(1949)

ラズロ・ベネディク監督 『セールスマンの死』(1951)

ジョン・スタインベック 『エデンの東』(1952)

エリア・カザン監督 『エデンの東』(1954)

アーネスト・ヘミングウェイ 『老人と海』(1952)

ジョン・スタージェス監督 『老人と海』(1958)

アレクサンドル・ペドロフ監督 『老人と海』(1999)

トルーマン・カポーティ 『ティファニーで朝食を』(1958)

ブレイク・エドワーズ監督 『ティファニーで朝食を』(1961)

ジョゼフ・ヘラー 『キャッチ-22』(1961)

マイク・ニコルズ監督 『キャッチ-22』(1970)

トルーマン・カポーティ 『冷血』(1966)

リチャード・ブルックス監督 『冷血』(1967)

アーシュラ・K・ル＝グウィン 『ゲド戦記』(1968-2001)

『影との戦い』 *A Wizard of Earthsea* (原作1968年、邦訳1976年)

『こわれた腕環』 *The Tombs of Atuan* (原作1971年、邦訳1976年)

『さいはての島へ』 *The Farthest Shore* (原作 1972 年、邦訳 1977 年)
『帰還 -ゲド戦記最後の書-』 *Tehanu, The Last Book of Earthsea* (原作 1990
年、邦訳 1993 年)
『アースシーの風』 *The Other Wind* (原作 2001 年、邦訳 2003 年)
『ゲド戦記外伝』 *Tales from Earthsea* (原作 2001 年、邦訳 2004 年)
宮崎吾朗監督 『ゲド戦記』 (2006 年)
(*原作の第 3 巻以降をメインにした独自の脚本)

エリック・シーガル 『ある愛の詩』 (1970)
アーサー・ヒラー監督 『ある愛の詩』 (1970)

スティーヴン・エドウィン・キング 『キャリアー』 (1974)
ブライアン・デ・パルマ監督 『キャリアー』 (1976)

アレックス・ヘイリー 『ルーツ』 (1976)
デヴィッド・グリーン他監督 『ルーツ』 (1977)

スティーヴン・エドウィン・キング 『シャイニング』 (1977)
スタンリー・キューブリック監督 『シャイニング』 (1980)
ミック・ギャリス監督 『シャイニング』 (1997)

ジョン・アーヴィング 『ガープの世界』 (1978)
ジョージ・ロイ・ヒル監督 『ガープの世界』 (1982)

スティーヴン・エドウィン・キング 『デッド・ゾーン』 (1979)
デヴィッド・コロネンバーグ監督 『コロネンバーグのデッド・ゾーン』
(1983)

ジョン・アーヴィング 『ホテル・ニューハンプシャー』 (1981)
トニー・リチャードソン監督 『ホテル・ニューハンプシャー』 (1984)

ジョン・アーヴィング 『サイダー・ハウス・ルール』 (1985)
ラッセ・ハルストレム監督 『サイダー・ハウス・ルール』 (1999)

スティーヴン・エドウィン・キング 『IT』 (1986)
トミー・リー・ウォーレマ監督 『IT/イット』 (1990)

スティーヴン・エドウィン・キング 『ミザリー』 (1987)
ロブ・ライナー監督 『ミザリー』 (1990)

ジョン・グリシャム 『ペリカン文書』 (1992)
アラン・J・バクラ監督 『ペリカン文書』 (1993)

ジョン・グリシャム 『依頼人』 (1993)
ジョエル・シューマカー監督 『依頼人』 (1994)

スティーヴン・エドウィン・キング 『グリーン・マイル』 (1996)
フランク・ダラボン監督 『グリーン・マイル』 (1999)

8 キャラクター&童話

1) フランケンシュタイン(イギリス)

メアリー・シェリー『フランケンシュタイン』(1818)が原作で、怪物を作った博士の名前であるが、今ではその怪物の名前として一人歩きしている。この作品は怪奇小説の元祖と言われている。

2) ドラキュラ(イギリス)

ブラム・ストーカー『ドラキュラ』(1898)が原作。ドラキュラ退治に乗り出すヴァン・ヘルシングが登場し、以後、魔物退治の代名詞として使われるようになる。ヴァン・ヘルシングの話も独立して作られるようになる。

3) ピーター・パン、ウェンディ、フック(イギリス)

ジェームズ・バリー『ピーター・パン』(1904)が原作でももとは舞台用の脚本から小説化された。

4) ピーター・ラビット(イギリス)

原作者はベアトリクス・ポッター Beatrix Helen Potter (1866-1943)。Lancashireの裕福な家庭に育つ。教育は家庭教師のみ。避暑先の湖水地方 Lake Districtを愛し、動植物を写生。1893年家庭教師の息子の見舞いに書いた絵入り手紙が *The Tale of Peter Rabbit* の原型で、1901年、250部を自費出版。以降23冊のシリーズは児童文学の古典となった

5) アリス(イギリス)

『不思議の国のアリス』(1865)、『鏡の国のアリス』(1871)の主演。原作者はルイス・キャロル Lewis Carroll (1832-1892)。

6) くまのプーさん (イギリス)

原作者はアラン・ミルン Alan Alexaner Milne (1882-1956)。童話集 *When We Were Very Young* (1924)、*Now We Are Six* (1927)、息子とぬいぐるみが主人公の童話 *Winnie-the-Pooh* (1926)、続編 *The House at Pooh* (1928)は、Ernest H. Shepard 挿絵で児童文学の古典。*Pooh*はラテン語など諸国語版、Walt Disney のアニメ版、タオイズムやビジネス・マニュアルへの応用版にもなった。Milne 自身は童話作家とは見られたがらず、また実際の父子関係は冷たく、息子の Christopher Robin は童話のモデルになったことが原因で、極度の人間嫌いになった。

8) パディントン・ベア Paddington Bear

英国のマイケル・ボンドの童話。赤い帽子、青いダッフルコートに赤い靴のくまのお話。

9) シャーロック・ホームズ

A. Conan Doyle が創造した私立探偵。ロンドンの架空の場所 221B , Baker Street に住み、Dr Watson とともに難事件を次々と解決した。

10) 「三匹の子豚」

1853年にJ・O・ハリウェルが採集した昔話で、ジェイコブズ の『イギリス昔話集』(1890)に収録されている。3匹のブタが家を建てる。この話は、グリムの『オオカミと7匹の子ヤギ』(*The Wolf and the Seven Little Kids*)にいくぶん似ている

11) 「ジャックと豆の木」(「ジャックと豆のつる」)

12) 「幸福の王子」

13) 『フランダースの犬』

イギリスのウィーダ(Ouida)の書いた童話。物語の舞台はベルギー北部のフランダース(フランドル)地方。1872年の作品。孤児ネロと愛犬パトラッシュの物語。TVのアニメ作品になって、日本では絶大な人気を得ている。活字版は、一時、TVアニメ絵本しかなかった時期もあったが、2003年に岩波書店から並装の廉価版が発売された。

9 参考文献

英米文学辞典・英米文学史

斎藤勇編 『研究社英米文学辞典』(研究社、1937年)

『講座英米文学史』(13巻)(大修館書店、1971年9月～2001年4月)

須藤暢雄、繁尾久 『教養としての英米文学』(南雲堂、1975年12月)

田島俊雄、中島斉、松本唯史 『アメリカ文学案内』(朝日出版社、1977年5月)

鈴木幸夫編 『英米文学名句名言辞典』(東京堂出版、1986年1月)

野町二、岡本通 『英米文学ハンドブック』(開文堂出版、1987年3月、増補第3訂版)

ヘンドリックソン/横山徳爾訳 『英米文学エピソード事典』(北星堂書店、1988年4月)

荒竹出版編集部編 『年表アメリカ文学史』(荒竹出版、1988年6月)

荒竹出版編集部編 『年表イギリス文学史』(荒竹出版、1989年2月)

深沢俊、塚野千晶共編 『イギリス文学小事典』(北星堂書店、1989年5月)

笠原勝朗 『英米文学翻訳書目』(沖積舎、1991年3月)

鈴木幸夫編 『英米文学辞典』(東京堂出版、1991年11月、第5版)

D.L.Kirkpatrick 編/岩元巖、酒本雅之監修 『アメリカ文学作家作品事典』(本の友社、1991年12月)

定松正他編『イギリス文学地名事典』(研究社出版、1992年8月)
渡辺恵子編『英米文学の名作を知る本』(研究社出版、1997年2月)
E.D.ハーシュ他/中村保男訳『アメリカ教養辞典』(丸善、1997年3月)
船戸英夫、中野記偉編著『じてん・英米のキャラクター』(研究社、1998年8月)
定松正、本多英明編著『英米児童文学辞典』(研究社、2001年4月)
ミルワード/小泉博一訳『童話の国イギリス』(中央公論新社、2001年10月)
野町二、荒井良雄編『イギリス文学案内』(朝日出版社、2002年9月)
上田和夫編『イギリス文学辞典』(研究社、2004年1月)

シェイクスピア(辞典・事典・書誌)

小津次郎編『シェイクスピア・ハンドブック』(南雲堂、1969年11月)
倉橋健編『シェイクスピア辞典』(東京堂出版、1972年8月)
為房裕子、中島厚子編『日本におけるシェイクスピア書誌』(女子聖学院短期大学、
1984年3月)
福田恆存監修『シェイクスピア ハンドブック』(三省堂、1987年9月)
佐々木隆編『日本シェイクスピア総覧』(エルピス、1990年4月)
高橋康也編『シェイクスピア・ハンドブック』(新書館、1994年12月)
佐々木隆編『日本シェイクスピア総覧2』(エルピス、1995年4月)
小津次郎編『シェイクスピア作品鑑賞事典』(南雲堂、1997年5月)
ケネル、ジョンソン/荒木正純訳『シェイクスピア人名事典』(東洋書林、1997年
11月)
高橋康也監修/佐々木隆編『シェイクスピア研究資料集成』(別巻1)(日本図書セ
ンタ-、1998年6月)
高橋康也監修/佐々木隆編『シェイクスピア研究資料集成』(別巻2)(日本図書セ
ンタ-、1998年6月)
高橋康也、大場建治、喜志哲雄、村上淑郎編『研究社シェイクスピア辞典』(研究社、
2000年11月)

荒井良雄，大場建治，川崎淳之助編『シェイクスピア大事典』（日本図書センター、2002年10月）

シェイクスピア（名言集）

坪内士行編訳『シェイクスピア名言警句集』（京文社、1959年5月）

本多顕彰『シェイクスピア名言集』（講談社、1965年10月）

本多顕彰『シェイクスピア名言集』（ポプラ社、1968年7月）

近代文学研究会編『シェイクスピアの言葉』（芳賀書店、1969年2月）

小津次郎，関本まや子訳編『シェイクスピアの言葉』（弥生書房、1969年12月）

近代思想研究会編『シェイクスピアの言葉』（新文学書房、1977年10月）

斉藤祐蔵編訳『シェイクスピア名言集』（大修館書店、1982年9月）

村石利夫編『シェイクスピア名句辞典』（日本文芸社、1983年12月）

ミルワード／安西徹雄訳『シェイクスピアの人生観』（新潮社、1985年1月）

阿部良『シェイクスピア 名文句名せりふの事典』（日本実業出版、1985年7月）

小田島雄志『シェイクスピア名言集』（岩波書店、1985年12月）

ミルワード／安西徹雄訳『シェイクスピア劇の名台詞』（講談社学術文庫）（講談社、1986年7月）

森谷佐三郎『シェイクスピア名句集』（荒竹出版、1988年5月）

小津次郎，関本まや子訳編『シェイクスピアの言葉』（弥生書房、新装版）（1990年5月）

マクローン／村上淑郎，小田島雄志訳『シェイクスピア名せりふ』（ジャパントイムズ、1991年10月）

鈴木忠夫『シェイクスピアから知恵の言葉』（リーベル出版、1993年10月）

池田仁『シェイクスピアの人間観』（新樹社、1997年8月）

シェイクスピア研究会編『シェイクスピア傑作警句集』（山海堂、1997年10月）

安西徹雄『シェイクスピアの名セリフ100』（丸善ライブラリー）（丸善、2001年9月）

中野春夫 『シェイクスピアの英語で学ぶここの一番の決めゼリフ』(マガジンハウス、2002年6月)

斎藤和明 『人生の悩みに、この名ゼリフ』(主婦の友社、2002年12月)

英米文学と映画に関する参考文献

曾根田憲三 『アメリカ文学と映画：原作から映像へ』(開文社出版、1999年3月)

八尋春海編 『映画で楽しむアメリカ文学』(金星堂、1999年5月)

八尋春海他編 『映画で楽しむイギリス文学』(金星堂、1999年5月)

今泉容子 『スクリーンの英文学』(彩流社、1999年5月)

シェイクスピア映画に関する参考文献

荒井良雄 『シェイクスピア劇上演論』(新樹社、1972年1月)

マンヴェルノ荒井良雄訳 『シェイクスピアと映画』(白水社、1974年4月)

荒井良雄 『イギリス演劇と映画』(新樹社、1982年11月)

荒井良雄 『英米文学映画化作品論』(新樹社、1996年5月)

森祐希子 『映画で読むシェイクスピア』(紀伊國屋書店、1996年5月)

狩野良規 『シェイクスピア・オン・スクリーン』(三修社、1996年10月)

高橋康也監修/佐々木隆編 『シェイクスピア研究資料集成』(第30巻、シェイクスピア映画評集、日本図書センター、1998年6月)

狩野良規 『映画になったシェイクスピア』(三修社、2001年10月)

ジャクソン編/北川重男監訳 『シェイクスピア映画論』(開文社、2004年2月)

資料作成者・講演者

佐々木 隆

2004年4月より武蔵野学院大学国際コミュニケーション学部教授（現在に至る）。
2007年4月より武蔵野学院大学大学院国際コミュニケーション研究科教授（現在に至る）博士（英文学）。大学院・大学でのおもな担当科目は「国際文化交流特殊講義」「英米文学史」「西欧文化事情」等。これまでに「英文学概論」「米文学概論」「西欧文化社会事情」「演習（国際関係論）」の担当経験がある。

私自身の履歴・研究業績・教育業績等については、ホームページにて公開しているのでご覧戴きたい。

佐々木隆研究室 <http://www.ssk.econfn.com>